

「語源の話」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

◎なぜ語源は分からなくなるのか

→時を経て語の形が変わるから
 →時を経て語の意味が変わるから

} できるだけ古い時代にさかのぼって
 そこからの変化をたどることが必要

* 語源を考えることは、ことばの歴史を深く知ることにつながる

1. 導入1 (さまざまな語源 (個別的なもの))

- ①地名に由来するもの カステラ (スペインのカスティーリャ地方)、ポートワイン (ポルトガルのポルト港)
- ②人名に由来するもの 備長炭 (元禄時代の備後屋長右衛門)、サンドイッチ (イギリスのサンドイッチ伯爵)
- ③企業名に由来するもの ドーラン (ドイツのドーラン社)、バリカン (フランスのバリカン・エ・マール社)
- ④商品名に由来するもの チャック (広島の日開閉機会社が「巾着」をもじって付けた商標名)

2. 導入2 (やさし、うつくし、こ、ねこ)

- ①世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば
 (万葉集 卷5-893 山上憶良)

* 「やさし」は、動詞「瘦す」と語源を同じくする形容詞。

身も細るようだ→遠慮がちで控えめだ
 肩身が狭い

→ 優美だ、思いやりがある
 → 平易だ

- ②父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐしうつくし 世の中は かくぞ道理
 (万葉集 卷5-800 山上憶良)

- ③うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。……雛の調度。……なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし。……
 (枕草子 154段)

* 「うつくし」は、かわいく思うこと。いとしく思うこと。平安時代には小さいものをかわいいと思う気持ち。

④「こ」さまざま

a 海鼠（なまこ）、熬子（いりこ）、海鼠腸（このわた）

b 蚕（かいこ）、桑子（くわこ） * 飼ひ蚕

* たらちねの母が養ふ蚕の繭まよこも隠りいぶせくもあるか妹いもに逢はずして

（万葉集 卷12 - 2991）

c 茸（きのこ）、筍（たけのこ）

d 鳥の子（とりのこ）、卵（たまご） * 玉子（たまご）

e 眼（まなこ） * 目まな子

⑤「ねこ」の語源

- ・ 諸説あり。よく寝るから（寝子）、寝るを好むから、ニコ（似虎）の転など
- ・ 鳴き声説が有力。

* 猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。……端近く寄り臥したまへるに、来て、
ねうねう、といとらうたげになれば、」（源氏物語 若菜下）

* ベこ（牛。ベーバー）、ねこ（ねうねう）、からす、すずめ

* 「猫」という漢字の字音「メウ」（呉音）も鳴き声に基づく。

【語源を考える上で必要なこと】

- 漢字表記にはとらわれない。
- できるだけ古い時代の語形・語義にさかのぼって考える。
- 歴史的仮名遣い（旧かな）で考える。
- ローマ字で考えてみる。
- 同種・同類の例を探してみる。

3. 露出形と被覆形

【単独だとエ段、熟語になるとア段】

- | | | |
|---------|------------|------------|
| ① つめ（爪） | つまさき（爪先） | つまづく（爪突く） |
| | つまはじき（爪弾き） | つまびき（爪弾き） |
| | つまむ（摘む） | つまようじ（爪楊枝） |
| ② さけ（酒） | さかぐら（酒蔵） | さかだる（酒樽） |
| | さかづき（酒盃） | さかな（肴） |
| | さかば（酒場） | さかもり（酒盛り） |
| ③ あめ（雨） | あまおと（雨音） | あまがえる（雨蛙） |
| | あまがさ（雨傘） | あまぐ（雨具） |
| | あまごい（雨乞い） | あまだれ（雨垂れ） |
| | あまど（雨戸） | あまもり（雨漏り） |
| ④ かね（金） | かなあみ（金網） | かなぐ（金具） |
| | かなしばり（金縛り） | かなづち（金槌） |
| | かなぼう（金棒） | かなもの（金物） |

⑤いね（稲）	いなご（蝗）	いなづま（稲妻）
	いなば（稲葉）	いなほ（稲穂）
⑥め（目）	まつげ（目つ毛）	まなこ（目な子）
	まなざし（目な差し）	まなじり（目な尻）
	まばたき（目叩き）	まばゆい（目映い）
	まぶた（目蓋）	まへ（前／ま（目）＋へ（方））

【単独だとイ段、熟語になるとオ段】

①き（木）	こかげ（木陰）	こがらし（木枯）
	こずえ（木末）	こだち（木立）
	こだま（木霊）	こっぱ（木端）
	このは（木の葉）	こもれび（木漏れ日）
②ひ（火）	ほてる（火照る）	ほのほ（炎／火の穂）

*「穂」は「秀」。稲穂、波の穂、槍の穂先、伊香保、穂高

4. 頭子音Sの有無のペア

①死ぬ（ナ変）	s i n u
去ぬ（ナ変）	i n u
②咲く（四段）	s a k u
開く（四段）	a k u
③据ゑ（下二段）	s u w e
植ゑ（下二段）	u w e
④棄つ（下二段）	s u t u
うつ（下二段）	u t u
⑤薩摩	s a t u m a
あづま	a d u m a

5. 漢語起源の言葉

- ・ 銭（セン→ぜに）、馬（マ→むま）、梅（メイ→むめ）、
鬼（オン（隠）→おに）、縁（エン→えにし）

○ 訓と間違えそうな音……菊（キク）、駅（エキ）など

6. 動詞の連用形からできた名詞

- ・ 編む→網 歌う→謡 かぶく→歌舞伎 暮らす→暮らし 恋ふ→恋
さぶらふ→さぶらひ（侍） 散る→塵 掘る→堀 光る→光
- ・ 「あおぐ」と「扇」 あふぐ（扇ぐ）→あふぎ（扇）

7. 撥音化して次の音が濁音になって成立した語

- ・ すみすり（墨磨り）→（スンズリ）→すずり（硯）
- ・ ふみて（文手）→（フンデ）→ふで（筆）
- ・ のみと（飲み門）→（ノンド）→のど（喉）

8. 単語家族の例

- ①いき（息）、いきる（生きる）、いこふ（憩ふ）、なげき（嘆き／長＋息）
- ②をとめ（乙女）、をとこ（男） *「年若い」の意。
- ③いかめし（厳）、いかづち（雷）、いかる（怒）、いかほ〔地名〕
- ④みづ（水）、みなかみ（水な上）、みなと（港／水な門）、
みなもと（源／水な元）、いづみ（泉／出づ水）

9. 女房言葉

- ①語の下部を省略し、上に「お」を付ける
 - ・かき餅 → お＋かき（もち）→ おかき
 - ・（副食物の）数物 → お＋かず（もの）→ おかず
 - ・強飯 → お＋こは（いひ）→ おこは
 - ・田楽 → お＋でん（がく）→ おでん
- ②語の下部を省略し、下に「もじ」を付ける
 - ・髪（かみ）→ かもじ
 - ・杓子（しゃくし）→ しゃもじ
- ③語の最初の音を繰り返す（その上に「お」を付けることもある）
 - ・酒 → ささ
 - ・かつをぶし → おかか

10. 地名表記（近江・紀伊について）

- ①「近江」はどうして「おうみ」と訓むのか？ 「おうみ」の意味は？
 - ・「うみ」という語は、海水の海だけでなく、淡水のうみ（湖）も含んだ。
 - ・淡水の「うみ」を指す語には、「みづうみ（水海）」または「あはうみ（淡海）」がある。海水の「うみ」は「しほうみ（塩海）」。
 - ・現在の滋賀県は、日本最大の湖である琵琶湖があるので、淡海国といった。よみは「あはうみ」→「あふみ」。
 - ・現在の静岡県西部は浜名湖があるので、「遠淡海（とほつあふみ）」の国といった。今の滋賀県は「近淡海（ちかつあふみ）」の国。遠近は都から見て。
 - ・大宝元年（701）頃、国名は漢字二字と定められた。「近淡海」「遠淡海」はともに漢字三字なので、「淡海」を「江」と置き換え、「近江」「遠江」と改めた。よみは従来通り、「ちかつあふみ」「とほつあふみ」のまま。
 - ・両国を区別するのに、遠江を「とほつあふみ」といえば、近江をあえて「ちかつあふみ」という必要はなく、単に「あふみ」というようになった。
- ②「紀伊国」はもとは「^{きのくに}木国」。和歌山県は木が多いから。しかし、大宝年間の規定により、「木」1字では不可となった。そこで、「き」を万葉仮名の「紀」で表記し、これに、「き」の母音「i」を万葉仮名「伊」で付加し、「紀伊」とした。関西では、「火」を「ひい」と発音するように、母音が強い。
 - ・表記は「紀伊国」となっても、読みは長い間「きのくに」のままであった。「紀伊国屋」は今でも「きのくにや」と読む。